慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	階級闘争説に於けるマルクスと其の先駆者
Sub Title	
Author	平井, 新
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1926
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.20, No.8 (1926. 8) ,p.1001(83)- 1025(107)
JaLC DOI	10.14991/001.19260801-0083
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19260801-0083

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

階級闘爭説に於けるマルクスと其の先驅者

平井　新

一

凡そ、マルクシズムの體系中、就中異説區々として、毀譽褒貶相半ばするもの階級闘爭説に若くものは無いであらう。而して其の之ある、固よりマルクス及びエンゲルスが其生前、斯説に關する系統的敍述を與えず、又其諸著中に現はれたる斷片的用語章句の適〻多樣多岐にして、其眞意捕捉の難澁なることに其責の一半を歸せざる可からずとするも、而も他方斯説を論評する者が、多くは、巷間の傳統的臆説を固執して、更に積極的詮鑒、究明の勞を執らず動〻もすれば遽に嘲殺的態度に出でんとするの事實に由ること更に遙かに大なる事を認めざるを得ないのである。爰に於いてか、斯かる迷論臆説を排して、マルクス、エンゲルスの所論の眞意を詮鑒、確定し以て彼等の所謂階級闘爭説の本質を闡明しなければならない。爰に Jahrbuch für Soziologie, hrsg. v. Gottfried Salomon. II. Bd. 1926 に收錄せらるる Heinrich Cunow の論文 Zur Geschichte der Klassenkampftheorie を抄譯し、併て一二の蛇足を加へし筆者の婆心も之あるに他ならぬ。因に、筆者は、必ずしも悉く原著者の見解に服するものに非ざる旨を附記して置く。

二

吾人は先づマルクスの階級闘爭說に關して、巷間所說の如何に深き迷妄に陷れるかを指摘して見度いと思ふ。——

吾々は、殊更勞働者に資本家に對する利害對立の念を深くさせて、資本家に對する勞働者の闘爭を敎唆せんとの一念から、階級闘爭說はマルクスの發見であるなどと書き立ててゐる政治的出版物の少なくない事を認める。彼等の見る所に依れば、階級とか、特殊の階級的利害等は存在するものではない。成程、職業別、身分並に之に關連する位階と言ふものはあるが、併し乍ら特に階級と言ふものは存在しない。蓋し、通例階級と稱せられてゐるものは決して、統一的なものでもなければ又包括的のものでもないから。所謂階級の一員と雖も多かれ、少なかれ共通の利害の他に、多くの個人的、職業的、政治的利害を持て居て、是等の利害が却て所謂階級的利害よりも、彼等の生活に對して重大な意義を持てゐるのを常とする。加之是等の利害は屢〻相互に相交錯して何人が一定の階級に屬してゐるかを決定するのは寧ろ困難な位である。例之工場に於ける高給の職工長の如く、自らは肉體的勞働を營まないが他の勞働者に勞働を配布し、之が監督の任に當れる者を勞働者階級に加へる事が出來るであらうか。而して大地主の階級は如何であらうか。幾何の所有地と家畜とを持てば、普通の農夫でも大地主になれるだらうか、縱令一定の所有地を持てゐる農夫を大地主に加へても、而も其の負債の種類、土地の位置、交通及び販路の關係からして、相互に全く異つた利益を持てゐる事を看過してはならないと。

以上述べしが如き論據から、彼等は常に次の如く論を結んで謂ふマルクス及び其一味の觀念するが如き階級は存立するものではない。階級とは斯くて一個の想定物である。其故にマルクスの階級闘爭說は、支持す可からざる假定の上に基けるものであると。

斯種の見解は、社會組織を研究せる經濟學的社會學的著作の裡にも之を散見する事は決して珍しい事ではないのである。是等の著書と雖も勿論歷史の經過と共に、分業、職業別、財產並に所得の分配に基いて、階級が構成せらるゝ事を否定しないが、併し乍ら階級を以て全く、漫然不確定の構成物となし、其成員相互を結合せる階級的利害の如きは、之を歷史的發展の上から見れば、一般社會的、國政的利害に比し、殆んど顧慮するに足りない底のものであると做して居る。彼等以爲らく、カール・マルクスが共產黨宣言の中で、『凡て旣往の歷史は階級闘爭の歷史である』と言てゐるのは、歷史的事實を全然誤解せるものであると。成程、旣往を顧れば、夙に古代希臘及び羅馬に於いては、一種の階級闘爭はあつた、併し乍ら、諸國民の歷史的發展の跡を通觀する時は、階級闘爭は、單に第二義的の役割を力めたに過ぎるのみならず而も又階級闘爭の結果は、決して社會の進步を齎らさず、寧ろ社會生活の完全なる混亂を誘致せしのみであつた。國民の下層階級を抑壓し、以て彼等の階級闘爭を煽唆しても、社會の改造更新が行はれざることは固り自然の數である、況して積極的建設の創造おや、唯〻齎らさるるものは獨り社會の破壞あるのみであると。

或は謂ふ、マルクスが、階級闘爭を政權攫取の手段として勞働者階級に推擧したのは、只管、資本家に對して勞働者を煽唆し以て戰闘部隊を組織せんとの政治的野心に基くものであると。這般の

消息を傳ふる好適例はグシュタフ・シュモーラーである。彼に由ればマルクスはブルジョワジイに對する憎惡から、かゝる階級闘爭說を懷抱するに到れるものである、即ち彼は其著『一般國民經濟原理』（本書の一部は一九一八年其夫人に依て、『社會問題、階級構成、勞働者問題、階級闘爭』なる標題の下に印刷された）に於いて論じて謂ふ、

『目的を意識せる階級精神を助成することは、若し之に依り却て、狂妄なる憎惡、嫉視を促し、或は他階級との友誼的關係を破壞し、蔑視するに至るの所緣とならなければ、必ずしも咎む可きものではない。マルクスは悲觀論者であり、憎惡の傀儡であつた。彼がプロレタリアの不滿、就中階級的憎惡を助成せしむ可き總てのものを是認するに到れる所以のものは、一つに彼が唯だ一八四〇年より一八六〇年に到る英國の社會狀態を識れるのみにて、更に獨逸の社會狀態を究めず、彼の思想又心理的、倫理的、政治的基礎を虧き、更に彼の精神が總ゆる憲法史の機械論並に恒に缺く可からざる平和の建設者たり、仲裁者たる可き法律及び公的權力に無關心なりしが爲めである、全獨逸社會民主主義の運動が嫌ふ可き情熱地獄の邪道に彷徨へる所以の原因は、一方に於いて、マルクスの逐客的猜忌、彼の暴君的憎惡、彼の熾烈なる情熱と他方に於いて下層プロレタリア及び盲目的煽動家の禽獸と撰ぶ無き粗暴とに存する』。

予の見る所に依れば多數の社會學者を導いて、隱れたるマルクスの動機を忖度し、階級闘爭並其歷史的發展過程に於ける役割に關し、斯かる淺薄固陋の批評をなすに到らしめた誤謬は、彼等が之を觀察するに當て多くは單に現今の政治道德的立場並に傳來の社會道德的見解を固執し、階級概念並に階級闘爭觀の歷史的發展の問題を全く度外視してゐると云ふ事に存する。併し乍ら、予の見る所では斯種の淺薄な研究は何れも、階級闘爭は決してマルクスの發見と言ふ事は出來ない、マルクスは階級論の方面に於いて多數の先驅者を有し是等の先驅者から多くの思想を採り入れたものである事を證明せんと欲するものの樣に思はれる。

三

貧富の兩階級並に支配、被支配の兩階級は既に古代國家に存在して居た。而して是等兩階級間の闘爭は當時の史實に決して乏しくはない。併し乍ら是等階級間の對立が如何に顯著であつたか、將又是等の階級構成並に其歷史的基礎に關する說明を、此當時の著作に覓むるも徒勞である。奴隷並に國政より除外された不自由なる市民の存在は、自然の所與であり、國家的必然であり、社會生活並に社會秩序に缺く可からざる基礎と看做されて居た。蓋し貴族及び自由民が彼等の生計に必要なる勞働を自ら營まざる可からざるものなりとせば、彼等が、國家及び町村の政務に鞅掌し、軍事の訓練を受け、而て國務を顧る可き閑暇を何處に求む可きであるか。

國民を分ちて、支配階級並に被支配階級の區別を設ける事は當時の國家學者には、秩序ある國家の必然的前提であると考へられた。アリストートルすら、奴隷制度は、勞働要具が人間の指揮を俟たずに奴隷の勞務を營む事を得るに到つて始めて撤廢せらるゝであらう、即ち、梭が獨り手に織り、チテルが獨り手に奏でられるに到つて始めて撤廢せらるゝであらうと信じて居た事は人の知る通りである。

加之當時の人々は諸般の國家的制度を、專ら人間の資性、及び能力の表現に過ぎざるものとなし、從て又奴隷制度を以て人性の相違より來れる自然的結果と考へた。奴隷は、無智、低劣の者であると考へられた。

プラトー及びアリストートル時代の見解に據れば、奴隷が奴隷たる所以は、彼が劣等、無智蒙昧であり、半獸であるからであると。併し乍ら此見解は、奴隷の一部には戰爭の捕虜があり其中には數多の勇士や、故國の政事に活動せし人士があると共に、奴隷の他の一部は、海賊に捕はれて、賣買された人々であると言ふ事實を指摘すれば、容易に之を反駁する事が出來た樣に思はれる。併し乍ら斯かる異論は、遂に殆んど顧みられなかつた。アリストートルは其『政治學』（第一卷、二、一七頁）で、捕虜が、打敗かされて、捕へられたのは、勝利者よりも能力の劣れる證據であると主張して、斯かる駁論を一蹴した。

奴隷自身も又アテネの有權市民と同樣に、自己の地位を今日の被抑壓階級とは全く異れる立場から見た。勿論當時、無產の平民も、奴隷と同じく市民權を剝奪せられたのであると感じた。併し乍ら今日吾人の所謂階級意識及び階級連帶感情と名付くるものは缺けて居た。奴隷は自分達が酷使せられたと感じて、此處彼處で主人に反抗したが併し乍ら彼等は尙未だ階級對立を識らなかつた。其故に彼等は、彼等の敵をば全體の上流主人階級と考へないで。彼等を虐待する個々の主人であると考へた。彼等の反抗は精々主人の手に握られて、抑壓のために用ひられた國家權力に對して向けられた位のものである。

中世に於いても亦、國家は、所謂下層の身分が上流の身分に從ひ、上層の身分は又國權、就中敎會の命に從ふ場合にのみ成立するものであるとの見解が一般に行はれて居たが併し乍ら此從屬關係を自然に附與された關係と見ないで、寧ろ神の與え給ふた關係、別言すれば神の創造した世界秩序の一部であると考へた。斯かる見解の前提如何に關しては加特力敎會最大の煩瑣哲學者トーマス・ダキノが之を說明してゐる。簡單に要約すれば次の如くである、即ち國家は道義的生活を營むために全く必要なる制度であり、敎會に次いで人間最高の協同生活である。併し乍ら國家が欲望充足てふ自己の社會的目的を遂行するためには分業及び職業の分化が必要となる、即ち必然的に國家の中に不快、苛酷、汚穢な勞働を營み、而も敎養無きが故に國政並に市政から除外せらるゝ集團が存在しなければならないと、併し乍ら其意は支配階級が所謂『卑賤なる人々』を自己の思ふ儘に處理し得ると言ふのでは無い。トーマス・ダキノに據れば、彼等は、敎會の命令を奉じて、好意的に且つ正當に進退したのである。

是等の見解が、斯る階級組織に對する被支配階級の反抗を防止せしは、自然の數である、蓋し、斯る階級別が自然に與えられしものであり、神の與え給ひし物なりとせば、之を撤廢する事は無稽の企である。縱令被抑壓階級が支配階級に反抗しても彼等の要求は、決して總ての階級組織を撤廢する迄には臻らず、唯單に不幸を除去し、自らも亦、地位の向上を望んだに過ぎないのであつた。

爰に吾人の看過してならぬのは、當時の身分並に職業別は、今日の階級とは別種のもので而も全く異つた社會的生活關係に基けるものであると云ふ事である。例を手工業者並に職人階級に採れば、

後者は決して親方階級と全く反對の利害を有する階級ではない。職人階級は寧ろ親方階級に到るまでの過渡的階級である。職人は親方と全く違つた生活條件の下に生活して居なかつた。通常彼は親方の家で起居し、而して一定期間、職人として働いて、軈ては親方の娘と結婚して、親方の仕事を承け繼いだり、或ひは自分で仕事を興したりするのは決して珍しい事ではなかつた。今日大工場主と勞働者との間に存するが如き社會的隺隙は存在しなかつたのである。

中世末期の大都市、主として商業都市には、職人階級の他に、之より地位のもつと低い純粹のプロレタリア階級が既に存在してゐた。併し乍ら此階級は決して、同一の經營に從事して、特殊の地位を有する統一的集團ではなかつた。此階級の少部分は所謂『不正なる』營業に從事せる僕僕と勞働者から成り、其大部分は、病人、不具者、乞食、勞働嫌ひの寄食者から成り、何等明白なる階級的性質を有ては居なかつた。彼等は此處彼處で、有產者の同情と慈善に訴へるために屢〻結合したが尙未だ、同種の感情を持たず加之上流階級に對して鞏固なる結束を作ることの必要を理解しなかつた。彼等は富者を嫉み、其の富を羨んだ。而して富者の喜捨で生活した。彼等は又何か特別の保護を調達し得た同僚を憎惡を以て迫害し、之を憎む可き競爭者と考へた。

此集團は今日の意味に於ける眞の階級意識を有せず、況して、上流階級に對し、團結して、鬪爭的態度を採る事はなかつた。勿論彼等と雖も自己の地位の壓迫を感じた。而して又屢〻他の黨派の驥尾に付して十五世紀、十六世紀の都市の政爭に參加したのであるが、併し乍ら其多くは、何時來るとも無き共產社會に、微なる一縷の望をよせて、幾に憂を遣り、埃つも甲斐なき幸福に見果てぬ夢路を追ふてゐた。——

斯くて十六世紀、十七世紀には、爲政者に對する各種の建白、社會改良の幼稚な計畫、より善き社會秩序並に國家秩序の模型として理想國家を描く者も少くはなかつたが併し乍ら此時代の文獻中に、歷史的現象としての階級構成に關する言說は到底覓む可くも無い。

四

近世的大國家の勃興と共に、最早從來の如き狹隘なる都市に限られざる政治的鬪爭の發生するに到りし事、分業の進步、大商業の發達並に之に伴ふて惹起されし富の分化等、是等の事實に促れて十八世紀の道德哲學及び法律哲學は、競ふて、現前に行はれつゝある社會組織の變遷を研究するに到つた。加之是と共に數多の社會的弊害も又續出するに到つた。

加之、工場工業の勃興に伴ふ手工業衰微の結果として勞働關係は爰に一變した。一方曾に勞働者の數は益〻增加し。又生產過程に對する彼等の社會的意義も增大すると共に他方彼等の經濟的地位は資本家のそれに比して著しく劣惡となつた。自ら資本家とならんとの期望も今や勞働者には望寡なのものとなつた。勞働者は、少數の例外を除いて自己の境涯を脫する事が出來なくなつた。斯くて又勞働者と資本家との關係も益〻稀薄となり、此上兩者を結び付ける紐帶は專ら賃銀契約のみとなつた。今や勞働者と資本家とは終生、互に全く異れる別個の社會階級の中に生活する事となつた。

斯る發展の結果として、十八世紀の社會學者並に社會哲學者の見解が自ら變化するに到つた。彼等が新社會關係を觀察するに當て、屢〻逢着せし問題は『斯る階級別は何處より到來せしや、其原

因は如何、更に斯る階級別は社會の進歩を促進するものなりや將之を阻害するものなりや』と云ふ事であつた。

當時の社會哲學者は斯る問題を提出して、多くは次の如き結論に到達した。階級別は身分別、職業別と殆んど撰ぶ所なきものであつて、全く最初の分業並に職業分化の自然的結果である。而して、是等分業及職業別は亦人間天賦の資性の相異と關連せるものであると。彼等の見解に據れば、階級別は又幾分は權力、即ち古代に於ける强力なる民族の弱少民族征服に基くものであると。

斯かる社會哲學者の見解を代表す可き好個の典型はジョン・ミラー John Millar の著 "Observations concerning the distinctions of ranks in society. Lond., 1771" である。彼は尙ほ未だ、身分、職業別、階級を區別しなかつた。彼は總て是等の發生原因を、一方に於いて、分業の進歩並に之より生じた職業の編制、他方に於いて、原始社會に於ける戰爭指揮官の成立並に隣邦異民族の征服に覓めた。

吾人は又 Karl Dietrich Hüllman, "Geschichte des Ursprungs der Ständein Deutschland." Frankfurt. a. d. O. 1806) 及び C. Meiners "Geschichte der Ungleichheit der Stände," Hannover 1792) 等の如き獨逸の社會史家の研究の裡にも尙ほ未だ階級の概念を發見する事は出來ない。彼等は只舊來の階級を認めたに過ぎない。其故に彼等の敍述は、唯だ單に貴族、僧侶及び彼等に依れば產業階級、農民階級並に官吏階級から編制せられた所謂第三階級が如何にして成立せしや、更に是等の階級は中世末期の國家、殊に地方政府の憲法中に如何なる法律的地位を占むるかの問題に終始してゐた。勞働者階級としての勞働者階級即ち當時の所謂第四階級は尙ほ未だ彼等の識らざる所であつた。

トマス・ホッブスの國家發生理論を承けて、更に十八世紀社會の階級編制を究めた者に Simon Nikolas Linguet がある。併し彼も亦階級と身分とを區別する所無かつた。彼は其著 "Theorie des loi civiles ou principes fondamenteaux de la société" 1767 に於いて、社會階級の起源を權力行爲に覓めた。彼謂へらく、經濟の發展に伴ふて、狩獵群、漁獵群の外に、平和的な土地耕作者並に遊牧民の小さき社會が發生した。軈て狩獵群は財產に誘惑されて、土地耕作者を襲ひ、之を征服し、其財產の大部分を攫得して、彼等を服從と隷屬の境涯に陷れた。斯くて社會の一部が他の一部に服從する事となり、其の結果今日の政治的社會、若くは眞正社會の根本的基礎たる所有別、權力別、階級別が發生する事となつたのであると。

勿論、下層階級の上層階級に對する服從關係の形態は時代の經過に伴ふて多樣に變化した。原始民族の暴力的隷屬に次いで、古代の奴隷制度が現はれ、此の後を承けて中世の隷屬が現はれ、軈て又中世の隷屬に續いて近世の雇傭制度が現はれた。而も、隷屬の形態が外面的に如何に變化しても、下層階級の支配階級に對する隷屬の事實は依然として渝るところが無かつた。多くの人々は、貧者が餘儀なく自己を奴隷として、或は勞働者として資本家に身賣りをする今日の雇傭制度、賃銀奴隷制度を古代の奴隷制度とは全く異れるものである、何んとなれば今日の勞働者は自由であるからである、と考へて居るが、ランゲに依ればそれは一個の僞囁である。彼謂えらく、古代の奴隷制度は賃銀制度に遙かに勝れるものである、何となれば、賃銀勞働者は、失業して、餓死すると云ふ、古代の奴隷の全く知らない恐怖に常に嚇かれてゐるからである。ランゲは其著四六六頁で次の如く言

つてゐる。曰く、

『汝等は、彼が自由だと言ふ、嗚呼、併し乍ら不幸は正しく其處に存するのだ。成程、彼は何人の事も顧慮しない。併し、何人も亦彼を顧慮しない。彼を雇ふ時には出來だけ安い賃銀を拂ふ。彼に約束した僅少の賃銀は、勞働者の生活資料の價格にも充たない。無理に仕事を捗どらせる爲に監督者を付ける。狡猾に怠けて力の出し惜みをしないかとの懸念から、勞働者を驅使し、鞭撻する。出來るだけ長く、同一の勞仕事に從事し度いとの考が勞働の敏速を妨げ、勞働要具を毀しはせぬかと懸念する。彼は確かに自由である。彼を不憐に思ふのも正に其の爲めである。人は彼を勞働させる場合の方が遙かに思遣りが無い。彼は勞働者の生命に關する場合に却て大膽となる。奴隷は主人に取て、貴重である。何となれば、奴隷は主人にとつて金に値したからである。併し乍ら勞働者は、之を使役する富裕の浪費家には何の價値もない。奴隷制度の行はれし時代に在ては人間の血が一個の價値を有した、少くとも市場で賣買せらる相場だけの價値を有した。併し賣られなくなつてからは、實際に於いて何等の價値を有しなくなつた』と、

階級相互を分ち、上層階級に支配權を保障するものは、ランゲに依れば所有の別である、が單なる富ではなくて、上層階級が勞働要具を領有し、之に依て、無產者の勞働を强制するの事實に依るものである。

ランゲと類似の見解を有するものは „Réflexions sur la formation et la déstribution des richesses 1766" の著者 Anne Robert Jacques Turgot である。彼に依れば、階級相互を分つものは、啻に所有の大小のみならず又所有の種類の相違、例之、土地所有、工場の所有、享樂品の所有、並に單なる勞働力の所有之である、彼は其著六〇節に於いて、產業階級に關說して曰く

『社會の種々なる欲望に應じて、無限に多樣なる產業的勞働に從事してゐる全階級は二個の小部類に分たれる。其一は、企業家、工業主であつて何れも大資本を擁し、之を前貸して、利殖してゐる。其二は、單に自己の勞働力を所有するのみで、自己の勞働以外何物をも投資せず、自己の勞銀以外何物をも獲得せざる單純なる勞働者である』と。

五

佛蘭西大革命の經驗を俟て、爰に階級別の認識は更に鮮明となつた。革命の當初、第三階級は貴族、僧侶と全く利害を異にする統一的階級と考へられたが、革命の經過と共に、所謂第三階級は更に利害を異にする多數の階級から成つ居る事が判明するに到つた。之と同じく貴族、僧侶も又幾多の下位階級に分たれて居る事が認められるに到つた。

當時の階級別並に之より生ずる利害の對立を最も深く洞察せしは Jean Paul Marat であつた。彼の階級闘爭觀は既に後年マルクスの懷抱せし階級闘爭說の各種の根本的要素を包藏してゐる。革命時代の階級闘爭に關する彼の特別の著書と言ふ可きものは無いが、彼の見解は『人民の友』並に „Journal de la république française" の幾多の論文中に散見する事が出來る。固より彼の見解は、理論的に若くは歷史的實例に依て確立せられしものでは無く、適〻眼前に展開する現象を觀察して得たる結果に他ならない。

マラーの見解に依れば、一七八九年乃至一七九三年の全佛蘭西革命は、特定階級が自己の特殊の利益を貫徹するための闘爭である。是等の階級とは、宮廷貴族、封建貴族、ブルジョワジイ、（金融業者、大相場師、大企業家）知識階級（富有なる學者、高等裁判官、代理人、顧問官、辯護士）裕福なる商人（所謂商業を營む中流階級）自作農民、並に眞正の國民（小手工業者、普通の勞働者及び職人、日傭人、小農人、小官吏及び無産の智識階級）である。而して此最後のものをマラーは根本に於いて統一せる大プロレタリア階級と考へた。大ブルジョワジー及び裕福なる商人は先づ革命に依て、封建貴族、宮廷貴族の羈絆を破らんと欲した。之に依て、富裕なるブルジョワジイ、殊に金權貴族政治及び其御用を力むる智識階級が國民議會及び地方行政の牛耳を握る事となつた。それから裕福なる商人（ジロンド黨員）が政權を得、今や（一七九三年の春）人民自身が結局政府を組織する段取となるであらう。何んとなれば、嘗て第三階級が貴族の特權を打破せし時と同樣に、無産者も亦富者の特權と掠奪物とを奪ふために自由の原理を利用する事が出來るからである。

一七九一年九月二十一日の『人民の友』誌上で、マラーは、貴族政治に對する所謂ブルジョワジイの闘爭を簡單に敍べ、かくて、何故に第三階級の上部が、一度、政權を握るや、間も無く貴族、僧侶と結托して、以て自己の地盤を擁護し、下層階級の攻擊に遇ふまでも王政を支持するに到つたかの理由を說明した。マラーに依れば、富裕なるブルジョワジイをして斯かる態度に出でしめた利害の動機は正に次の如くである。曰く、

『是等名譽慾に燃ゆる隱謀家、怯懦な宮廷の動物の周圍に、軈て、支持者として、衛兵として、貴族、僧侶、軍人、大官、行政、司法の高官、財政家、投機商、公けの吸血鬼、饒舌家、横紙破り、宮廷の毒蟲、一言にして言へば、自己の地位、財産、希望を專ら政權の濫用に繫いでゐる總ての人々、腐敗、企業、浪費を利用せんとする總ての人々、及び利益のために誤れる事態の永續に興味を持つ總ての人々が蝟集した。而も亦是等の周圍に漸次多くの取卷が現はれた、卽ち一方に於いては富豪や不規律な家庭の子息の濫費のお陰で致富の機會を得た商人、高利貸、小手工業者、奢侈工業の勞働者、文士、學者、藝術家があり更に又他方に於いて、自由を、利殖を妨げる障碍の撤廢であると考へ、更に所有や、我儘な享樂生活の保障であると考へてゐる大商人、資本家、及び安逸を覓めるブルジョワがあつた』と。

更に說明して言ふ、革命の推移と共に、市民を各種の階級に分つ可き各種利害の對立が益〻明瞭に現はれた。第三階級と雖も決して統一せられたものと見る事は出來ない、何となれば、それは、各々利害、所有及地位を異にする幾多の階級を包擁せるからである。斯の如く利害關係生活關係等の相違は、軈て、人生觀や、慣習、嗜向の相違を齎らす事となる。卽ちマラーは『人民の友』六六九號で次の如く言つてゐる。

『總ての他の君主國と同樣、フランスに於ても國民は、種々異つた利害を有する多數の階級に分岐した。而して是等の階級は、地位や所有の不平等に依てよりも寧ろ其敎養、偏見、嗜向、習俗、及び全生活方法に依て、相互に分岐せるものである。例之、貴族、僧侶、官僚、財政家、裕福なるブルジョワと、無産者、卽ち支配階級と被抑壓階級之である』と。

是等の所說に由て觀るも明かなるが如く、旣にマラーは、總て各階級の特殊の見解、觀方、及び特殊の思想圈、マルクスの語法を用ふれば、特殊のイデオロギーは當該階級の勞働條件、生活條件に適應して構成せらるゝものであるとの見解を抱いてゐた。

同種の思想は又ルイ・プルュードム Louis Prudhomme の編輯せし急進ジャコバン主義の機關誌 "Révolutions de Paris" にも覩ふ事が出來るが、マラーの『人民の友』に見るが如き鋭さは無く、又寧ろ倫理的色調を帶びてゐた。其後姑く政黨の軋轢を階級闘爭と認むる思想は姿を消してゐたが、十九世紀の四十年代の初に到つて新なる革命時代が來るや、再び階級闘爭の觀念は擡頭した。併し乍ら、有產階級の利害の闘爭は所有別の擴大、產業の進歩、富の增大と相竢て愈〻深刻となるとの見解は夙に二十年三十年代のフランスの政治上の文獻の裡に屢〻表明せられてゐる。其顯著なる者は François Auguste Mignet の有名なる著作 "Histoire de la Révolution française" 1824 である。ミネーは、貴族を、宮廷貴族、官僚貴族、封建貴族の三階級に區別した。彼を僧侶を二階級に岐ち、其一を、僧正管區、僧院、寄附に依て莫大なる收入を得てゐる僧正に、其二を所謂『使徒の事業』を續けてゐる普通の牧師とした。更に彼は革命時代の第三階級を二つに岐つた。其一はバスティユ襲擊後政權を攫取した裕福な中產階級であり、其二は中產階級より民衆へ到る過渡的階級たる普通の中產階級であつてジロンド黨に屬した裕福なる商人の如きものが之に屬する。是等の階級の他に、ミネーは最下層の階級として、多數の無產者即ち『民衆』を擧げた。此『民衆』は彼に由れば、其利害を特にロベスピエール主義者、マラー主義者、エーベルト主義者の諸黨派に代表するものである。之以上ミネーは革命時代のフランス國民の階級編制を詮鑿しなかつた。即ち彼は『民衆』の階級別を認めず、從て又上記の所謂急進的黨派の間に行はれし闘爭を理會しなかつた。

又此時代の著作には、何れも、從來尙不明瞭なりし階級の概念が、從來に比して遙かに嚴密、明確に述べられてゐる。例之 M. Granier de Cassagnae は其著 "Histoire des classes ouvrières et des classes bourgeoises" Brüssel 1838 の中で、勞働者階級とプロレタリアを同一視する事を非難してゐる。彼に依れば、勞働者階級更に嚴密に言へば、賃銀勞働者階級は唯纔にプロレタリアの一部をなすに過ぎない。プロレタリアには勞働者階級の外、乞食、盜賊、娼婦等が之に屬する。勞働者階級の特徵は單なる無產や、手から口への生活では無く、彼等が賃銀のために資本家に勞働を給付しなければならないと云ふ事實に存すると。

六

カール・マルクスは一八四三年十一月巴里に居をトし、此地に亡命中、初めて前記フランスの諸著作に親む事となつた。之より先、彼は夙にフランス革命史に少からざる興味を持つて居たが、今此地に來て更に Augustin Thierry, F. Guizot, Pierre Leroux, Jean Charles Léonard Simonde de Sismondi, Philippe Benjamin Buchez 等の著書を深く研究し、又サン・シモン派、フリエエ派の運動を研究した。

マルクスが又マラーの『人民の友』及びプルュードムの『巴里の革命』を知つて居た事は疑ふ餘地はない。其證據には、當時マルクスは此二書を購ひ、彼の死後、エンゲルスの手に渡り更にエンゲル

スの沒後伯林社會民主黨記錄保存所に移された。

由是觀之、マルクスが階級闘爭說を發見せし者であるが如く說くのは斯說の歷史を全く誤解してゐる證據である。事實彼は決して何物をも發見した譯ではない。彼は前記の諸著に現はれた階級闘爭說の種々の要素を收拾補綴して、之より自家の結論を導き出したに過ぎぬ。事實上、マルクスの階級對立觀並に初期の階級概念は著しく、傳來の階級闘爭說の影響の跡を遺してゐる。彼は近世的階級闘爭を以て、單に有產階級對無產階級、更に嚴密に言へば、賃銀勞働者階級對大企業家階級の闘爭と看做してゐる。爰にラング及びチュルゴーの思想の影響を觀取する事が出來る。『共產黨宣言』に於いても亦現今の闘爭は根本的には、勞働者階級對大企業家階級との單なる軋轢であると述べられてゐる。勿論『共產黨宣言』では眞正のブルジョワジイの外に『中產階級』なる語が用ひられてゐるが、それは滅亡に瀕せる而も反動的なブルジョワジイの附屬物であると、數行で片付けられてゐる。加之革命後に現はれた前記フランスの著作に於けると全く同樣に、『共產黨宣言』に於いても亦勞働者階級とプロレタリアが全く同視せられてゐる。斯の如く先づ、社會階級を二分した動機に就て『共產黨宣言』は次の如く云つてゐる。

『吾々の時代、即ちブルジョワジイの時代の特徵は階級對立が單純化した事である。全社會は益々敵視せる二大陣營、即直接相互に對立する二大階級に分裂しつゝある。ブルジョワジイとプロレタリア即之である』と。

マルクスは初期の著作では、身分 Stand と階級 Klasse とを同義語として用ひてゐる。例へば『ヘーゲル法理學批判』では勞働者階級を尙ほ身分であると說き更に『共產黨宣言』第一部でも次の如く言つてゐる。

『古代の歷史を繙く者は、殆んど到る處に於て、社會が種々の身分に全然區分され、社會的地位の多樣なる等級を見出すであらう。古代羅馬に於いては、貴族、騎士、平民、奴隷があり、中世に於ては、封建諸侯、家臣、同業組合の親方、職人、體樸があり且つ是等階級の殆んど總てに、又夫々の特別な等級があつた』と。

爰に、封建諸侯、同業組合の親方、職人が、單に階級と說かれてゐるが、事實上是等はエンゲルスの定義に從へば決して社會階級では無く、寧ろ國家で定められた特殊の身分上の權利義務を有する身分であつたのである。

遮莫マルクスは、佛蘭西諸家の傳統的なる、不明瞭なる階級概念を何時迄も固執しては居なかつた。一八四七年公刊された『哲學の貧困』の裡に這般の消息を窺ふ事が出來る。彼以爲らく、

『勞働者階級の解放條件は、總ゆる階級の撤廢であること、恰も、第三階級 Der dritte Stand の解放條件、即ちブルジョワ制度確立の條件が總ゆる身分の撤廢であつたのと同じである』と。

後年エンゲルスは此章句に註釋して謂ふ。

『爰に謂ふ身分とは、封建國家の身分てふ歷史的意義を有するもので特定の限られた特權を有する身分の謂である。ブルジョワジイの革命は是等の身分と特權とを併せ撤廢した、ブルジョワ社會には只階級のみが、依然として存在する。從てプロレタリアを第四の身分 „vierter Stand" と名付ける

のは全く歴史と撞着する』と。

マルクスは後年の著作では常に、階級と身分とを明確に區別してゐる。即ち前者は、一定の經濟關係に基く經濟的、社會的集團であり、後者は、一定の身分的權利を有する國家的、政治的集團である。フェルヂナンド・ラッサルは勞働者階級を第四の身分と名付けたが忽ちエンゲルスのために非難された。

軈てマルクスは一八四二年乃至五二年に於けるフランスの政治的闘爭を親しく見聞するに及んで次の如く確心するに到つた、即ちブルジョワジイ自身も亦種々の階級より成れる事、從て單に『ブルジョワジイとプロレタリア』の對立を考へるのみでは到底此時代の社會運動を理會する事が出來ないと。かくてマルクスは『佛蘭西に於ける階級闘爭』の中では、フランスのブルジョワジイを大ブルジョワジイと小ブルジョワジイに分ち更に前者を金融的ブルジョワジイと工業的ブルジョワジイとに分つた。彼は又一八五二年に公刊した〝Der achtzehnte Brumaire des Louis Bonaparte〟の中で大小ブルジョワジイを特殊的階級として考察してゐるが、此區別法は、曩に一七八九年乃至九四年のフランスのブルジョワジイを富裕なる中產階級と無產者に落ち行く過渡的階級を構成する貧困なる中產階級とに分けたミネー Mignet の區分法を髣髴せしむるものがある。

マルクスが自家獨特の階級闘爭說を建設するに到つたのは、倫敦に移つて、英國の經濟生活と、之に伴ふ政治的隨伴現象を自家特有の見地から研究するに到つてからの事である。悲しい哉マルクスは自己の階級闘爭說に關する何等組織的なる敍述を遺してない。マルクスがかゝる研究を著はす心算であつた事は、後年エンゲルスがマルクスの遺稿中で發見し、資本論第三卷第二部の附錄として公にした斷片が之を證してゐる。固より此斷片は這個研究の序論をなすものに過ぎないが、之を他の斷片的所說と照合比較するときは、マルクスの階級闘爭說の眞髓を捕捉する事强ち不可能ではない。

マルクスは現代の資本的社會の社會階級を三の主要階級に分けて、其特徵を次の如く述べてゐる、『單なる勞働力の所有者、資本の所有者、土地所有者、にして其各々の所得の源泉は勞銀、利潤、地代である。かくて、賃銀勞働者、資本家、地主は、資本家的生產方法に基く近世的社會の三大階級を形成するものである』と。

是等三主要階級はまた夫々小さき部分階級に分れ、更に又是等總ての部分階級の間には、或種の過渡的階級が存在する。マルクスは勞働者階級のみを同一の勞働條件並に本質的に同一の生活條件を有する統一的階級と考へた。勿論マルクスは、農業勞働者の經濟的地位並に勞銀關係が、殆んど何れの國に於いても工業勞働者に比すれば遙に劣惡であり、加之地主に對する隷屬並之より受くる絞取の程度も遙かに大なるの事實を認めたが、彼は是故を以て、直ちに、農業勞働者と工業勞働者を區別し、以て兩者を夫々特殊的階級とは考へなかつた。之に反してエンゲルスは例之『獨民農民戰爭』〝Der deutsche Bauernkrieg〟及〝New York Tribune〟の一論文で、屢〻獨逸の農業勞働者階級を特殊的階級と做し、更に之を、獨立の經營を營む自由なる小農と、大農とに分けてゐる。

マルクスに依れば、賃銀勞働者階級の間に存する個々の職業團體は決して階級と考ふ可きではな

い。是等の個々の職業團體の現代の資本的社會に於いて占むる地位はその勞働關係、勞銀關係に就て見るも將又、資本家に對する從屬關係に就て見るも、決して、相互に異れる經濟的條件に基くものではない。例之勞働者は、鑛山業に從事するにせよ、織維工業に從事するにせよ、將又製靴業に從事するにせよ、等しく、皆賃銀のために勞働條件並に賃銀の利害が彼等を資本家に對して結合する。て餘剰勞働を給付する。かくて又同一の勞働力を賣り、縱令程度の差こそ存すれ、同じ方法に依

之と均しく醫師、辯護士、藝術家、教師等の職業は又特殊的階級と看做す可きものではない。是等の職業は共に、知識階級を構成し、マルクスの所謂一種の中間階級であつて、無產者的生活を營まざる限り、ブルジョワジイに數へらる可きものである。

之に反して、販賣の目的で商品を生產する工業家、此商品を賣買する商人、並に金融、兩換で生活してゐる銀行家は、何れも皆、資本家であるが經濟的經營の內部に於いては、種々の經濟的機能を行ひ、夫々特殊的活動範圍を有し、從つて特殊の經濟的、社會團體を構成する。マルクスは是等の團體を夫々資本家階級の部分階級と名付けた。

由是觀之、階級とは經濟的發展過程の一所產である。即ち特定の經濟的形態から發生し、特定の經濟的相互關係に基く社會層であつて、常に特殊的の同一經濟機能並利害を有するものである。マルクス（彼は初期の著作では勿論富の大小に重を置いたが）に依れば、財產の大小、所得の多寡は階級別の標準としては、寧ろ第二義的のものである。二、三十人の勞働者を使役する製靴業者も、かの多數の溶鑛爐、製鋼所、輪轉機を有し、二、三千の勞働者を使役する大工業家と同樣に、工業的企業家の階級に屬する。更に又、庭園付きの自宅を有し、多くの小工場主よりも遙かに大なる所得を有する職工長と雖も勞働者階級に屬する。何となれば彼は賃銀勞働者だからである。社會階級は決して單に財產階級ではない。其故に財產の大小は決して階級別の標準とはならない。

爰に、階級は經濟的發展の一所產であるとの命題から、階級は毫も不變不動のものに非ずとなすマルクスの見解が生れて來るのは寧ろ當然の事である。經濟關係と共に階級の特質も亦變化する。利害鬪爭の經過に伴れて、漸次階級の特質が構成される。總て階級は其初めに於いては、漫然不確定の構成物であつて、勿論其成員は共同の境遇と云ふ本能的感情を持つては居るが尙未だ自己特殊の經濟的地位（階級的地位）、共同の利益による結合、及び他階級との對立に對する認識、即ち眞正の階級意識を持たない。併し發達の經過に伴ふて、總ての階級は經濟的經營に於ける自家地位の特殊性を認識し、他の社會階級に對して、自己の特殊的利害を貫徹せんとするに到る。かくて爰に階級鬪爭が發生する。

マルクスは『哲學の貧困』の中で勞働者階級の發達過程を次の如く述べてゐる。

『勞働者が自ら組織を作らんとする最初の要求は恒に團結（コアリチオン）の形態を採る。一方大工業は互に知らぬ多數の人を一地域に集中せしめる。競爭は彼等の利益をして相反せしむるが、賃銀率の維持と云ふ雇主に對しての共同の利害は、共同の抵抗心に於いて彼等を相結合せしめる之が團結（コアリチオン）である。されば團結は、常に資本家に對して一般的競爭をなし得んがために、勞働者相互間の競爭を廢止すると云ふ二つの目的を持つてゐる。然るに抵抗の最初の目的は、僅かに賃銀維持の一事を出でなくても

資本家が資本家の側で、抑壓の爲めに相提携するに從つて始めの孤立的團結は集團を形成し、常に連合せる資本に對峙して、結社を維持することが賃銀の維持其事よりも彼等に取て必要事となる。英吉利經濟學者は、彼等の目から見れば、賃銀維持の爲めに設立せられたに外ならぬ結社の爲めに、勞働者が其賃銀の大部分を投ずるのを見て驚くのはこれが爲めである。此鬪爭――此の純然たる一個の市民戰――に於いて、凡ての要素が來るべき戰鬪の爲めに相結合し、發達する。一度此點に達すれば團結は政治的性質を帶びることになる』と。

社會主義的新聞雜誌等に於いて屢〻既に陳腐に歸した舊式の戰鬪方法に歸れの要求を見受けるが、それは何れもマルクスの階級鬪爭說を誤解せるに出でたるものである。蓋しマルクスの見解に依れば、生產方法の變遷と共に鬪爭の條件並に之に適應する鬪爭の形式も亦變化するものであるからである。

階級鬪爭は純然たる經濟的手段に關連すると共に政治的手段に關係を有する。階級の結束鞏固となり、自己の階級利害を有效に貫徹するに到れば、最早純然たる經濟的鬪爭手段だけでは不充分である。蓋しマルクスに依れば、現代の國家は、ブルジョワ社會の政治的組織であるが故に、若し國家秩序を動かさんとすれば、自ら一個の政治的組織即ち所謂政黨を造らなければならない。階級が政黨として國家に現はれても、兩者は決して同一物ではない。階級は經濟的發展から發生した經濟的社會的構成物であるに反して、政黨は一個の政治的目的を達する組織であり而も此組織は曾に一階級を包擁するものでは無く、多くの場合他の種々の階級の斷片をも包擁するものである。

之を要するにマルクスの階級鬪爭說の當否に關する近世經濟學者、社會學者の所說は、區々として今日尙ほ定說無き所であるが、Othmar Spann が、國家學辭典新版の『階級と身分』なる論文中で『近世の社會學者、經濟學者は何れも個人主義的階級概念殊にマルクスの精神を汲めるものである』と云つてゐるのは疑も無く正しい。嘗て斯くまで、虐けられしマルクスの階級鬪爭說も爰に甦生して近世社會學の中に着々新生面を開拓する事となつた。惟ふに之れ斯說の論理的完備の然らしむる所なりとするも、而も現行資本主義的國家に於いて階級鬪爭が重大なる役割を演じつゝあるの事實に負ふ所更に大なるが故である。

（一五・七・二一稿）